園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年9月

～ 心情・意欲・態度 ～

【ミニバスクラブ夏合宿に参加してきました】

●先日、少しの間お休みをいただき、息子が所属するミニバスケットボールクラブの夏合宿にコーチとして参加してきました。

●合宿場所は千葉県木更津市。旧市立中学校の跡地をリノベーションして整備された施設でした。

●広大な田園からは爽やかな風が吹き抜け、広い体育館と人工芝のグラウンドが併設されている、スポーツに専念するのに大変恵まれた環境でした（ただ1点、体育館にクーラーがないことだけ苦労しました…）。









●今回、日々保育園の仕事だけに全力投球の私が、どういうわけかミニバスのアシスタントコーチを引き受けることになり、その上仕事を休んでまで合宿に参加した理由。それは、男子チームのヘッドコーチを務めているＭさんの存在があるからです。

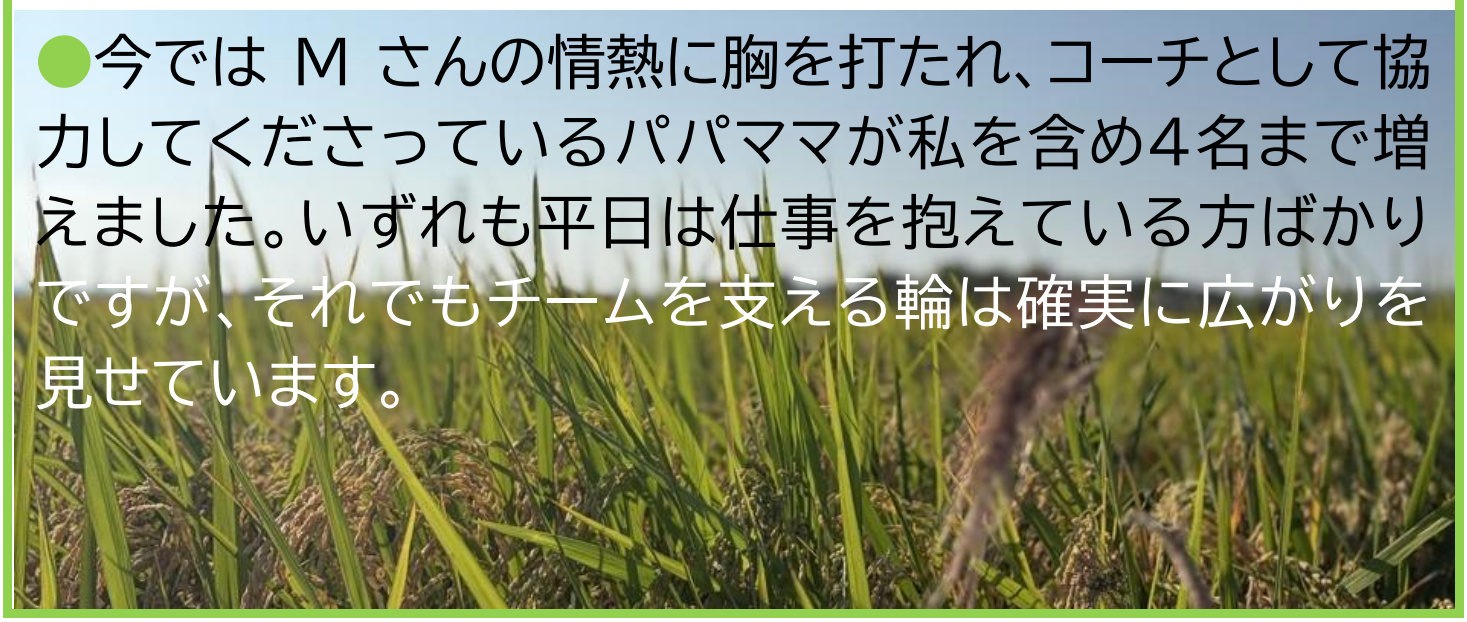
●Ｍさんは、都内某有名大学に通う2年生です。高校時代からボランティアでコーチを務めています。もともとＭさん自身が小学校時代にこのチームでキャプテンをしていました。その後、中学・高校とバスケットボールを続ける中で、自らがプレイヤーとして活躍する道よりも、指導者として、とりわけゴールデンエイジと呼ばれるミニバス年代（9～12歳）の子どもの育成に自らの情熱の対象がシフトしていったのだそうです。

●大学1～2年生と言えば、私の経験では最も遊びたい年頃です。当時の私の周囲を見渡しても、大体の友人は日々サークル活動やアルバイトに明け暮れ、貯めたお金で海外を放浪するなど自由を謳歌していました。

●しかしＭさんは違います。このクラブの創立者であり、爾来（じらい）長きにわたり指導者を務めていた方が一昨年前に突然退任してしまったのです。その日を境に男子チームの運営は、ほぼ Ｍ さん一人で行わねばならなくなりました。そのため、サークル活動もアルバイトもろくに行えず、週に6日間、Ｍさんの若きエネルギーの大半をミニバスクラブの運営・指導に費やしてきたというのです。

●私はまず、自分の息子がお世話になっているミニバスクラブの運営状況がそのようなことになっていることに驚きました。いくらボランティアのスポーツクラブと言え、子どもを預かる以上は責任が伴います。それを未成年の若者がほぼ一人で背負っている…。私はその事実に対する感謝・報恩の気持ちと「Ｍさんも本当は大学生らしい青春を謳歌したいのではないか…」といった同情の思いから、できる範囲で少しずつ練習を手伝うようになりました。

●しかし、実際の練習に参加するようになって私の同情の念は彼には無用ということがすぐに分かりました。Mさんにとっては、ミニバスコーチとして情熱を注ぐこと自体が彼の青春の謳歌であり、アルバイトやサークル活動よりも彼が本当にやりたかったことだということが、彼の言動からひしひしと伝わってくるのです。そして、Mさんの情熱に呼応するかのように、子どもたちの練習に取り組む姿勢には真剣味が宿り、体育館全体が心地よい緊張感と熱気、迫力に包まれていきます。



●今では Ｍ さんの情熱に胸を打たれ、コーチとして協力してくださっているパパママが私を含め４名まで増えました。いずれも平日は仕事を抱えている方ばかりですが、それでもチームを支える輪は確実に広がりを見せています。

【異年齢保育のようなMさんの関わり方】

●さて、合宿中のMさんと子どもとの関わりを観察していると、あることに気づきました。それは年齢的に当然と言えば当然なのですが、いわゆる**指導者と教え子との関係性よりも、むしろ保育園でも見られる異年齢集団の関係性に近い**のでは、ということです。

●例を挙げると、Mさんは練習中、初めに必ずお手本となる動きを見事に実演し、子どもたちの心を鷲掴みにします。その後は自分から細かく教えて回るというよりは、子どもからの自発的な質問を待ち、質問に対し丁寧に向き合うスタンスで練習を見守ります。

●また、子どもたちの練習姿勢に怠惰や消極的な部分が見られたときは、すぐさま練習を中断し、怒りの感情を露わにして厳しい口調で問いかけます。その口調は時として私たちパパママコーチからすると、子どもたちが怖がったり萎縮したりしてしまわないか心配になるほどです。当然その場に居合わせた大人として、子どものその後の気持ちを慎重にケアするのですが、直後に涙する場面は見られても、Mさんに対する恐怖感情や後々引きずるようなメンタルの過度な落ち込みは不思議と見られません。ほどなく気持ちを切り替え、練習に戻っていきます。Mさんの方も先ほどの怒りの感情はどこ吹く風で、再び子どもを明るく受け入れ、まるで何事もなかったかのように練習は再開されます。

●そして、練習の合間の食事休憩の時間や最終日の夜に行われたBBQでは、Mさんは常に子どもたちから大人気です。皆、兄を慕う弟のように我先にMさんにまとわりつきます。Mさんもそんな彼らの気持ちに本気で答えながらふざけたり、それはもう本当に楽しそうです。

●こういった様子からは、**大人「対」子どもという構造を前提に大人が絶対的な正解を持って子どもをあるべき姿へ導く**というよりも、まるで**全体で一つの生命体が自らエラーを起こした部位を修正しながら成長していく、そんな一体感**が感じられました。

●このような関係性は、Mさんと子どもたちの間に**互いにリスペクトし合う信頼関係の絆**がなければ実現し得ないと思います。発達段階が違うため、そのすべてを保育園の園児との関わりに適用することはできないにしても、異年齢の子ども集団に保育者としてどう関わるかについて非常に考えさせられました。

●それにしても、「ベストメンバーに入りたい！」「上手くなって試合で活躍したい！」「綺麗なレイアップシュートを決めたい！」等々、子どもたちがそれぞれの目標を胸に、自分の限界と向き合いながらひたむきに頑張る姿は感動的で、今回の合宿に立ち会えたことを本当に良かったと思っています。



【子どものやる気を引き出す大人の働きかけ】

●このように、子どもが主体的に努力を行い、途中の困難に負けず最後までやり抜く力を促すための大人の関わり方として私が思い出すのは、次の２つの感動的なエピソードです。以下ご紹介します。

【努力の上に辛抱という棒を立てる（タレント　桂小金治氏）】

●10 歳の頃、僕にとって忘れられない出来事があります。

●ある日、友達の家に行ったらハーモニカがあって、吹いてみたらすごく上手に演奏できたんです。無理だと知りつつも、家に帰ってハーモニカを買ってくれと親父にせがんでみた。すると親父は、「いい音ならこれで出せ」と神棚の榊の葉を一枚取って、それで「ふるさと」を吹いたんです。あまりの音色のよさに僕は思わず聞き惚れてしまった。

●もちろん、親父は吹き方など教えてはくれません。「俺にできておまえにできないわけがない」そう言われて学校の行き帰り、葉っぱをむしっては一人で草笛を練習しました。

●だけど、どんなに頑張ってみても一向に音は出ない。諦めて数日でやめてしまいました。これを知った親父がある日、「おまえ悔しくないのか。俺は吹けるがおまえは吹けない。おまえは俺に負けたんだぞ」と僕を一喝しました。続けて、**「一念発起は誰でもする。実行、努力までならみんなする。そこでやめたらドングリの背比べ**

で終わりなんだ。一歩抜きん出るには努力の上の辛抱という棒を立てるんだよ。この棒に花が咲くんだ」と。

●その言葉に触発されて僕は来る日も来る日も練習を続けました。そうやって何とかメロディーが奏でられるようになったんです。草笛が吹けるようになった日、さっそく親父の前で披露しました。得意満面の僕を見て親父は言いました。「偉そうな顔するなよ。何か一つのことができるようになった時、自分一人の手柄と思うな。世間の皆様のお力添えと感謝しなさい。錐（きり）だってそうじゃないか。片手で錐は揉めぬ」

●努力することに加えて、人様への感謝の気持ちが生きていく上でどれだけ大切かということを、この時、親父に気づかせてもらったんです。

●翌朝、目を覚ましたら枕元に新聞紙に包んだ細長いものがある。開けてみたらハーモニカでした。喜び勇んで親父のところに駆けつけると、「努力の上の辛抱を立てたんだろう。花が咲くのは当たりめえだよ」



幼いころの小金治さん

●子ども心にこんなに嬉しい言葉はありません。あまりに嬉しいものだから、お袋にも話したんです。するとお袋は、「ハーモニカは３日も前に買ってあったんだよ。お父ちゃんが言っていた。あの子はきっと草笛が吹けるようになるからってね。」僕の目から大粒の涙が流れ落ちました。

●いまでもこの時の心の震えるような感動は、色あせることなく心に鮮明に焼きついています。

（引用:『1 日 1 話、読めば心が熱くなる 365 人の仕事の教科書』 致知出版社）

●実に感動的なエピソードです。これを読んだとき、私もこんなかっこいい言葉をしかるべきタイミングで言い放てる父親になりたいものだと心から思いました。

【私は竜を見たことがある（ブータン国　ワンチュク国王）】

●もう一つのエピソードは、東日本大震災が起こった2011年、その年の11月に、ブータンのワンチュク国王が結婚したばかりの王妃とともに来日し、被災地相馬市の小学校を訪れ、子どもたちを激励してくださった時のお話です。

●国王は、子どもたちを前にこう切り出しました。

「私たちの国ブータンの国旗には、竜が描かれています。**私は、竜を見たことがあります。**」



ブータンの国旗

●思いがけない国王の言葉に

「えっ！？」と驚く子どもたち――。

その様子をしばし見届けた後、

国王はこう続けました。

●「**竜は私たち一人ひとりの心の中に住んでいます。**そして、竜は私たちの心の中で、自分の経験を食べて大きくなるのです。年を重ねれば、それだけ強くなります。だから皆さんも、**自分の中の竜を大事にしなければね。**」



ワンチュク国王

●震災直後の悲しくも辛い経験さえも糧にして強くなる竜を自分の中に育てなさい――。短くも強い、子どもたちでも非常に勇気をもらえるメッセージです。

【心情・意欲・態度に働きかける】

●さて、保育所保育指針において子どもの「心情、意欲、態度」を育むことは、「学びに向かう力」や「人間性」等を育むために重要とされています。今回のコラムで紹介したお三方に**共通する事**は、いずれも**子どもの「心情」の部分を刺激している**という点です。

心情 すごい！楽しそう！きれい！かわいい！

意欲 やってみたい！できるようになりたい！

態度 挑戦してみる！諦めない！



●私たちふかさわミル保育園も、子どもの姿や興味・関心をよく観察し、心情・意欲・態度それぞれのプロセスに効果的に働きかけるような工夫を、日頃の保育にたくさん取り入れていきたいなと考えています。

園長　橋本　英明